

墓地では花と線香を用意しております。

熊谷市仏教会主催

柴又帝釈天と浅草寺を訪ねる日帰り旅行

募集

- 十一月二十六日(水)
- 朝八時 上之・龍淵寺集合
- 十時半 柴又帝釈天本堂にて法話門前散策
- 昼食 東武ホテルバント東京
- 十四時 浅草寺本堂にて法話・散策
- 十八時頃 上之・龍淵寺帰着・解散
- 会費 五千円
- 申し込み 松岩寺へ
- ご注意 松岩寺住職は同行いたしません。

声を出して元気になる(中止)

9月24日 水曜日 PM1:30 ~ 3:00

九月二十四日に予定していた「声を出して元気になる」は講師の都合により中止します。



街かどに禅を探し現代に仏教を見つける

不連続シリーズ

見つけた!

郵便局で売っていた「お盆玉」袋を



節分に、恵方の方角を向いて、巻き寿司を食べるなんて習慣は、いつ頃から誰が流行らせたのだ! なぞと憤慨してもしようがない。今度は、お盆が狙われたようです。お気づきの方も多いでしょうが今年の夏、郵便局に「お盆玉」袋なるポチ袋が売られていました。つまり「お年玉」のお盆バージョンなのだという。

数年前から「お盆玉」なる言葉を登録商標して、機会をうかがっていた某企業の努力の甲斐があったか、郵便局の窓口に進出したのです。

努力の「甲斐」と書いたけれど、その企業の本社は山梨県にあって、はじめは手漉き和紙の間屋だったらしい。そして、事情通によると前回書いた「御仏前」袋を、はじめて作ったのもこの会社ではないかという。

昭和三十年に初版が出た『広辞苑』には、御霊前・御仏前の項目がないことも前回に書きました。平成三年の第四版になって始めて出てくる、新参者の言葉なのです。

時代が変われば言葉も習俗も変わります。そのことを否定しているわけではありません。何者かが姿を隠して、商魂で新しい習俗をつくりあげるからご用心、と言っているのです。いつてみれば、新しい「言葉」の製造元が明記されていない「御仏前」袋は、ちょっと怪しい。怪しいとは普通ではないこと。みんながやっているから正常だと思ったり、ほんとは異常なのです。誰かが「違っ」と声をあげねばと思つて、何度も書いてあるわけです。

色づかない街

もしかしてこれを若い人が読んでいたら「誰、それ」と笑われてしまいますが、南沙織に『色づく街』という歌がありました。四十年前の歌です。こんな歌詞です。「あの日別れた駅に立たずみ／ああ青い枯葉かんでみたの／街は色づくのに／会いたい人はこない」

『色づく街』というタイトルが好きです。「町」ではなくて「街」なのもうれしい。温暖化できれいに色づくことがすくなくなつたとはいえ、東京の絵画館前や大阪の御堂筋など、いつもは無愛想な大都会もこの季節だけは、色づく街に変身します。

熊谷だつて……と、言いたいところですが、熊谷中心部の街路樹は市役所通りのケヤキ並木以外の大部分が、色づく直前に剪定して葉をもぎ取られてしまいます。落ち葉の清掃に費用がかかるし、汚いと苦情が寄せられるのかもしれない。事情は推測できます。理解できます。でも、寂しいな。熊谷は、色づかない街なのです。

松岩寺はというと、近所の方には迷惑をかけていますが、ケヤキに楓にイチヨウ。ばらばらひらひらと落ちてくれます。イチヨウには銀杏がなります。十一月中旬から実が落ちますので好きな方は取りに来てください。

ところで、墓地で時々お叱りをつけます。「隣の墓地の百日紅の花がおちてくる」とか、「近くの高木が倒れそつで心配だ」。あるいは、「垣根のヒバの葉が落ちる」などなど。染井吉野を伐採して管理棟を新設した時は、「桜の花びらが落ちなくなつてよかった」と、喜んでくれた人がいましたが複雑な心境です。「緑を大切に、自然を守ろう」と掛け声だけは立派ですが、本当に緑が好きなのだろうか、自然に心を寄せているのだろうか、と疑います。

真夏の道を歩く人を、緑の陰でまもってくれた街路樹が、カラフルに着飾つて色づこうとしている矢先に葉をつんでしまふ。そんな無粋なことをしている熊谷よ。だから街が色づかないし、「会いたい人はこない」のだ。緑を守つて育てるには、少しばかりの我慢も必要ではないの! !